

多数が散華した」と暫時追想、眼頭に光るものを見た。筆者。

極秘電文

敵冬に頭から水を冠す

香川県 向山正数

私は東香川の松原で生まれ、家族は祖母と両親、兄が一人、私は次男で弟が一人、妹が二人の五人の兄妹の八人家族でした。

讃岐地方は瀬戸内海に面し、南に四国山脈（石槌山、剣山）があり、さらに中国地方が北風を防いでくれる関係で、気候温暖にして一年中生活し易いところでした。土地柄は事のほか人情味豊かで、空海（弘法大師様）が生誕なされたごとく、我が家においても家族団欒で楽しく、毎日笑い声が家内中に充満していました。

学業も義務教育終了後、高等科を経て社会人と

なり、町の青年会に入り、近隣の織物会社に勤めました。週三日、夕方から青年学校に通学し、卒業時には最優秀であると表彰されました。家業は地味が豊かですから農業が大半でした。父親は副業的に手袋製造会社に勤務し、機械修理等を行い会社には絶対必要な人として働いていました。

世はまさに軍国時代ですから、一に軍隊、二に軍人と、若者は心身鍛錬、精神修養と身体も心もお国の為にと教えられ導かれました。私も申しましたごとく働き、青年団でも活動し、柔道や銃剣術にも励み、柔道二段になっていました。

私は十九歳で徴兵志願を志しました。大川郡津田町公会堂で適齢者と一同に会して行われました。すべて終了しまして、全員整列し、徴兵執行官から、一人宛に申し渡しがあり、「向山正数、甲種合格」と発表されました。私は大きな声で「復唱！ 向山正数、甲種合格、有難う御座いました」と申告したら「元氣よし、向後、その気合

で頑張れ」と云われた事が今も耳に残っています。

翌、「昭和十八年四月十日、兵庫県加古川の尾上航空隊へ入隊せよ」との「命令書」を受領しました。そして盛大なお見送りを受けて出征しました。第二航空教育隊でした。

翌日から一般兵科訓練が行われました。同年八月に第一期検閲修了でした。同時に全員に特業命令が発令されました。自分は航空通信の暗号手を拝命しました。何人かで集合教育を受講することになりました。第一番にモールス信号から始まり、暗記する事と同時に手旗も修得させられました。これが諸通信、信号の原点との事でした。約百日余りで特業修了です。

この時点で、それぞれの行先が決定しました。外地・中国・南方と各方面に（航空関係基地）に分散しました。あの当時の同期生・同年兵は教育が厳しく、かつまた「切磋琢磨」激しく、自分の事で精いっぱい夢中だった故か、誰も記憶にあ

りません。

自分は、青森県八戸市沼宮内町にあった第六航空教育隊へ転属になり、暗号教育係の中田曹長と竹田・津村両班長と同道して入所しました。特別、極秘暗号教育でした。なお当所への入所は厳しい調査を要したとのことでした。とくに憲兵隊調査があり、民法上の血族、姻族三親等までに犯罪者、特に政治犯無きことなどに加えて、隊では極秘事項の關係上嚴重な試験がありました。全国で二千人受験し二十人採用だったと後で知らされました。

当所にて二カ月教育を受けた後、再移動しました。盛岡の駐屯部隊が北方の千島列島へ移動しました。その跡の兵營に、第六航空教育隊が全員移駐しました。この直後に盛岡武徳殿にて柔道大会があり、隊長より代表として選出されまして優勝したのは良い思い出の一つです。

教育隊の勉強は実に厳しい限りでした。一に乱数表、二に座標名、三、四とミンマ辞典と世界地

名辞典、その他、完全に熟知徹底的に頭へ入れることでした。

同年十二月に下士官候補生として、中部第一二八部隊、第七航空通信学校に入校しました。これは三重県齋宮にありました。通信文が最大の難題でした。暗号電報教育が大変でした。分秒を競って、着信解読と発信目録作成とを瞬間的に五体五感を活用しての作業でした。またこの間に暗号教育の練習交信でちょっとだけ（東部第五十三部隊）長野県松本に出張、赴任したこともありました。

昭和十九年四月、陸軍航空伍長に任官して、中部第一三三部隊、各務ヶ原航空隊勤務となりました。岐阜市加納町（城内）にある第五十一航空師団司令部に在籍しました。また武儀郡の敵原小学校において、初年兵や補充兵の教育を何回か行いました。僅か数カ月の教育で外地へ出て行く兵隊さん、特に妻子のあるような三十歳以上の人は気

の毒なようでした。

ある老兵達と長良川の川岸にて訓練していましたが、漁師さんが「兵隊さん鮎を喰って下さい」飛び跳ねてる若鮎を三十も四十四匹も頂戴しました。老いた兵隊さんと川岸にて焼いて食べました。涙を流して喜んでいましたが、彼らの内、何人が無事復員しただろうか。現在もあの当時の記念写真が四、五枚校舎を背景にして写っています。

第一三三部隊の各務ヶ原勤務も大変でした。岐阜の第五十一師団航空司令部との間を往復し（自動車で三十分）日々の命令会報の連絡下士官でした。業務内容を得た頃に、本来の専門である極秘電文「暗号発・受信」業務の任に着きました。

昭和二十年ともなれば、敵米国も、英、中、蘭と、それぞれ電波合戦をするごとく、種々の通信が入り乱れておりました。日本航空司令部発信の電波は、ここ各務ヶ原でした。そのために東京軍司令部の航空暗号担当官は五日乃至七日で暗号元

本の組立て、組替えを行っていました。そのため各務ヶ原から東京、立川飛行場に飛び、市ヶ谷にて「元本」を受領して蜻蛉返りで各務ヶ原へ帰りました。そして次期発令に備えて組み替え「暗号電文」の準備をしていました。

発令簿は超極秘で「総一連番号」にて綴られ、二重戸扉のある二重金庫に内蔵してあるのです。一応各務ヶ原が全日本航空軍への信号発信所だったから大変複雑な仕組みになっていました。

傍受にも全国一の装置がありました。米軍の海軍が近海に現れて発信しているのを、よく傍受しました。「G号発」は航空母艦から、「A号発」は戦艦で、「B号発」は巡洋艦でした。これらを解読しても、暗号係将校でないと言表できないのです。実質、発受信は全部解読し、また発信の組み合わせ等は自分達で行ったのです。

昭和十八年四月十八日「山本五十六大將、戦死」の第一報を受電したのは各務ヶ原の全日本航

空軍信号発受信所でした。また自分に暗号書が渡された時は大変でした。発信書の作成です。

自分専用の個室に籠って、一心不乱にやりました。雑念を排し精神の統一をはかり、厳冬の頃でも葉罐の氷のような水を頭から被って邪念を払って頑張りました。受信もまた敵信も解読するのが大変でした。濁点一つで、いろいろ変化するから「丸秘業務」は内面の労苦は計り知れぬと思う。

体験者でないと言表できないものです。暗号手（係）が判読、解読等で半ば気が変になり、軽い精神患者のごとくなりました。自分は無事に勤務に耐えたのは心は勿論、親から頂戴した健全な肉体の賜物だったのだと今思っても感謝あるのみです。

各務ヶ原航空隊には二〇〇機程度が待機していました。燃料は松根油（松の根を乾溜釜で蒸し焼きにして取る）を混入して、ドラム缶二千本ほどありましたが、これは約二時間分の燃料でした。

しかし純度九〇％では敵機と太刀打ちできぬ、飛び立つと同時に撃墜されることは目に見えていました。いよいよ航空隊も万事休すでした。

昭和二十年五月八日、ドイツ無条件降伏の報が入電しました。この時点で日本も連合軍に降伏していたら、何十、何百万の人達が生命を全うできたと思うと、残念でした。

終戦となって戦後処理のために、岐阜県加納町の司令部の例の二重金庫の中にあつた極秘文書を焼却するために、払暁から日没後まで、八月の炎天下で瀧のごとき汗を流しながら作業しました。結局自宅に帰つたのは九月の末でした。友達がお前は「糞真面目だ」と笑っていました。

部落で七人戦死者がいました。小学校の同窓生が十七人戦死しています。自分は戦地へ出陣せずに内地のみでしたが精神的苦労は山ほどありました。実際に砲煙弾雨の中を走った経験は無かったです。精神的苦労は充分しました。二カ年九

カ月の軍隊生活が戦後の活力となつて、たとえ僅かでも世の爲、人の為に働く事を誓い今日まで生きて来ました。余生も少しだと思いますが、何とぞ平和な日本、そして戦争の無い世界を祈念致します。有難う御座いました。

一年生のひよこ鷲

長野県 服部 幸雄

私は大正十四（一九二五）年三月一日、長野県伊那市大字伊那（本籍と現住所と同じ）に生まれました。

私が軍隊へ入つたのは、昭和十九（一九四四）年八月十五日で、在隊期間ちょうど一カ年。飛行機のパイロットとして未だ荒鷲、若鷲どころか、羽も生え揃わぬ「ひよこ鷲」で終戦となつた、実戦の体験も皆無でした。もっとも地上において敵機の攻撃から逃げ廻って待避したのは始終のこと